

映画「ビューティフルマインド」鑑賞による
精神看護学での学びの検討

中川京美・田沼佳代子・田邊要補・藤田 勇

Examination of learning in psychiatric nursing
by the movie “A Beautiful Mind” appreciation

Kyomi NAKAGAWA・Kayoko TANUMA・Yosuke TANABE・Isamu FUJITA

高崎健康福祉大学紀要 第18号 別刷

2019年3月

映画「ビューティフルマインド」鑑賞による 精神看護学での学びの検討

中川京美・田沼佳代子・田邊要補・藤田 勇¹⁾

(受理日 2018年9月14日, 受稿日 2018年12月20日)

Examination of learning in psychiatric nursing by the movie “A Beautiful Mind” appreciation

Kyomi NAKAGAWA · Kayoko TANUMA · Yosuke TANABE · Isamu FUJITA¹⁾

(Received Sept. 14, 2018, Accepted Dec. 20, 2018)

要 旨

精神看護学は目に見えない心を扱う領域であり、学生が具体的イメージをもつのは難しい学問である。学生にわかりやすく教授するための工夫として、映画「ビューティフルマインド」を鑑賞し、「考えたこと・感じたこと」を学生に記述してもらった。本研究は、そのレポートを分析し、学生の学びを明らかにすることを目的とした。同意が得られたA大学看護学科91名(84.3%)の学生のレポートのタイトルや本文をワード入力し、KH Coder 3を用いて、抽出語リストや共起ネットワーク、KWIC コンコーダンスなどの分析を行った。その結果、学生は統合失調症の特徴や症状の一部、患者や家族の思い、疾患を抱えながらも人生を歩むことができるということを学ぶことができている。また、精神に障がいをもつ人を一人の人として捉える視点を養っていた。精神看護学教育において、適切な映像教材を用いた学習は、精神に障がいをもつ人のイメージ化を図ることができ、学習効果が得られることが示唆された。

I. はじめに

精神看護学は、1997年保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の改正により、成人看護学から科目として独立した^{1,2)}。精神看護学で取り扱う内容は、精神に障がいをもつ人を対象とし

た精神科看護のみならず、心の健康を扱う領域としても拡大してきている。また、精神に障がいをもつ人を取り巻く環境も、臨床から地域へと情勢が大きく変化してきている。このような背景がある中で、精神看護学教育を充実させていくことは非常に重要である。

しかし、精神に障がいをもつ人と関わった経験のない学生が多く、マスコミに報道されたこ

1) 北里大学保健衛生専門学院

となどから恐怖心を抱く学生もいる³⁾。かつてのハンセン病者や結核を患った人と同様に、精神障がい者も社会から隔離されてきた事実がある。そのため、精神障がい者を一人の人というよりは、自分たちとは違う異質なものと捉える人が少なくないように思われる。精神看護学の授業を通し、精神に障がいをもつ人を、一人の人として捉えられるようになって欲しい。

そして、精神看護学は目に見えない心を扱う領域であり、学生が対象の体験を理解しにくく、精神看護とは何か、どのような援助をすればよいのかをイメージすることは難しいと、日々教育していく中で私たちは感じている。栗本ら⁴⁾も「精神疾患患者に対しての関わりが少ない学生は、精神を病んでいる対象理解および看護に対して具体的なイメージがつきにくい。」と述べている。また、谷本⁵⁾は精神看護学を担当する看護系大学教員にアンケート調査を行い、自由記載で「講義で困っている点」を記述してもらった所、「講義時間数の不足」や「教員の不足」の他、「精神機能や障害がイメージしにくい」という内容の記述があったと報告している。

本学でも、どうしたら精神に障がいをもつ人について、学生にわかりやすく教授できるか、試行錯誤しながら教育に取り組んでいる。その一つとして、1年生の精神看護学概論の講義の中で、映画「ビューティフルマインド」を鑑賞し、その後、A4レポート用紙1枚に“考えたこと・感じたこと”を書いてもらっている。レポートタイトルは、学生自身が記述した内容を反映させてつけてもらっている。江藤ら⁶⁾は、「シナリオ型ビデオ教材を用いた方がより統合失調症の患者をイメージ化でき、学習効果を得ることができる。」と述べている。また、篠原⁷⁾は「精神障がいは人生に影響を及ぼすほどの独特の体験

からなっている。テキストや当事者の体験に加えて、共感的理解を引き出す教材として良質な映像を今後も推奨したいと考えている。」と述べている。このように、紙面や言葉では伝えきれない部分を伝えるには、視聴覚教材の利用が有効である。精神疾患や精神に障がいをもつ人のイメージ化を図ることができれば、その理解を促し、関わり方を考えると共に、学生の不安、緊張の軽減にもつながるのではないかと考える。

映画「ビューティフルマインド」は、統合失調症を抱えた数学者の男性を主人公とした、実話に基づいた作品である。主人公であるジョンは、大学生の頃に統合失調症を発症する。幻覚・妄想などの症状があるものの、本人は病識がなく、治療せずに生活を送っていた。そのような状況の中で、ジョンはアリシアと結婚し、子どもも生まれる。しかし、仕事のストレスなどにより、次第に追い込まれ、幻覚・妄想に支配されてしまう。ようやく医療につながり、疾患と向き合っていくが、精神に障がいを抱えながら生活を送っていくことは、本人や家族にとって苦難の連続であった。それでも、友人のサポートや妻の愛に支えられ、数学者としてノーベル賞を受賞し、周囲からも尊敬される存在となった。

先行研究でも、映画「ビューティフルマインド」の鑑賞後に記述した感想を内容分析するなど、質的研究として取り組んだものがいくつかある。糸賀ら⁸⁾は、平成14年、15年に精神看護学の2年次に「ビューティフルマインド」のビデオを鑑賞した看護福祉専門学校看護学科49名の学生を対象に、鑑賞から得られた精神障がい者の理解について学生の認識傾向を明らかにすることを目的とし、鑑賞後のレポートの内容分析

を行った。学生は、「ビューティフルマインド」の鑑賞から、精神疾患と心の病をもつ人、精神看護、ケアの担い手、人間の理解について認識していたと述べている。また、原田ら⁹⁾は総論に該当する健康生活看護学（精神）を受講した看護学生2年生90名を対象に、映画「ビューティフルマインド」の視聴から、学生が精神を病むということをどのように理解したのか、その特徴を明らかにすることを目的とし、鑑賞後レポートを質的帰納的に分析している。学生は、学んだ知識を基に主人公の体験を通して、多様な感情を抱きながら精神を病むということを理解していたと述べている。しかし、先行研究では量的な分析を行った研究がなく、また、いずれも2年生を対象としており、1年生を対象にした研究も見当たらなかった。本学では、1年生で各看護学の概論は履修するが、疾患については2年生になってから学ぶことが多い。そのような状況の中で、素直に物事を捉えられるであろう初学者の1年生が、精神に障がいのある人に対して何を感じ、どう捉えたかを知ることが有意義なことである。

本研究では、KH Coder 3を用いて映画「ビューティフルマインド」鑑賞後のレポートを量的・質的に分析していく。その結果、学生の視点からどのような学びがあったのかを知り、研究者らが大事にしている「精神に障がいをもつ人を、一人の人として捉える」ということができたかどうかを検討することができる考える。

II. 目的

精神看護学概論の講義の中で、映画「ビューティフルマインド」を鑑賞し、その後記述した

レポートを検討することで、学生の視点からどのような学びがあったのかを明らかにする。また、研究者らが大事にしている「精神に障がいをもつ人を一人の人として捉える」視点をもつことができたのかどうかを明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

量的・質的研究

2. 研究期間

平成30年5月～平成30年9月

3. 研究対象者

A 大学看護学科

平成29年度1年生 男女合わせて110名

4. データ項目

1) データの内容

データは、平成29年度に1年生であった学生に、平成30年1月9日（火）精神看護学概論の最終講義で映画「ビューティフルマインド」を鑑賞した後、A4レポート用紙に“考えたこと・感じたこと”を書いてもらった。そして、レポート内容を反映させたタイトルを、学生自身につけてもらった。このレポートの評価は、1年生後期に終了している。研究の依頼については、今年度2年生となった学生に説明書を用いて研究の説明を行った。同意書の提出をもって同意が得られたものとし、同意が得られた学生のレポートのみ研究データとして使用した。

2) データの収集・入力方法

(1) データの収集方法

研究者が担当する講義以外の2限終了後、研

究責任者および研究分担者が教室に行き、学生に対して、研究の背景や目的、研究方法、自由参加であること、研究に参加しなくても不利益をこうむることはないこと、まして、研究への参加の有無が学業成績や単位取得に影響を与えることは今後も含めてない一切ないこと、研究参加後でも、理由の如何を問わずやめたいと思った時はいつでもやめることができること、同意書の提出をもって同意が得られたものとする、同意書回収箱は、説明をした教室の前および5号館1Fに、研究の説明をした翌日12時まで設置することなどを、文書と口頭で説明した。

尚、同意書には「1. タイトルおよび本文の両方の使用に同意します。」「2. タイトルのみ使用に同意します。」「3. 本文のみ使用に同意します。」の選択肢を設け、学生に選択してもらった。

(2) 入力方法

まず、レポートタイトル使用に同意が得られた学生全てのレポートタイトルをワード入力した。入力後、一人の研究分担者が原本のレポートタイトルを読み上げ、別の研究分担者がワード入力したものに間違いがないか確認を行った。その後、それぞれの役割を入れ替えて同様の手順を行い、複数で確認した。

次に、レポート本文使用に同意が得られた学生のレポートからランダムに10名分を抽出し、レポート本文をワード入力した。レポートタイトル入力と同様に、間違いがないか複数で確認して行った。レポート本文は、全員分を対象にできればベストと考えていたが、10名のレポート本文一人ひとりの抽出語を見ると、上位に出てきた単語は、「ジョン」、「アリア」、「存在」、「愛」等、同じような傾向であったため、今回

は研究に同意した89名の1割に近い10名を対象とした。

5. 分析方法

ワード入力したデータをKH Coder 3に読み込み、抽出語リストや共起ネットワーク、KWIC コンコーダンスなどの分析をした。

抽出語リストは、単語が全体の文章の中でどのくらいの頻度であらわれているのか、数字およびグラフの機能を用い可視化することができる。

共起ネットワークは、抽出語またはコードを用いて、出現パターンの似通ったものを線で結ぶ。すなわち共起関係を線で表したネットワークを描く。布置された位置よりも、線で結ばれているかどうかということに意味がある。

KWIC コンコーダンスは、キーワードを中心に前後に文脈を表示する方式である。気になったキーワードを選択することで、そのキーワードを用いた学生の思いや考えを、より正確に理解することができる。

6. 倫理的配慮

- 一人の研究分担者が、同意が得られた学生のレポートを選び出した後、レポートに記載されている学籍番号と氏名を黒マジックで塗りつぶした。別の研究分担者が、レポートにID番号を付けてデータ入力し、連結不可能匿名化を行った。
- データは、研究の目的以外には一切使用しない。
- インターネットに接続していないコンピューターを使用し、研究分担者がデータベースに入力した。デジタルデータはUSBメモリに保存し、デジタルデータおよびUSBメモリ

にはパスワードをかけてある。

- ・デジタルデータの入った USB メモリおよびレポートは研究室の保管庫に保管し、常時鍵を掛けてある。
- ・データの破棄については、研究終了後、5年が経過したらデジタルデータはコンピューターおよびUSBメモリから消去する。レポートも研究終了後、5年が経過したらシュレッダーなどにて裁断・破棄する。

尚、本研究を行うに当たり、研究者が所属する機関の倫理委員会の承認を得た（高崎健康大倫 3005 号）。

IV. 結果

A 大学看護学科の平成 30 年度 2 年生 108 名中、同意が得られた学生は 91 名（84.3%）であった。その内、タイトルおよび本文の両方の使用に同意が得られた学生は 86 名（94.5%）、タイトルのみ使用に同意した学生は 2 名（2.2%）、本文のみ使用に同意した学生は 3 名（3.3%）であった。

表 1 レポートタイトルの抽出語リスト n=88

抽出語	頻度	抽出語	頻度
愛	24	アリシア	3
統合失調症	15	学ぶ	3
人	12	幻覚	3
大切	11	自分	3
向き合う	6	乗り越える	3
支える	6	人間関係	3
ジョン	5	人生	3
周囲	5	正しい	3
病気	5	精神疾患	3
患者	4	大きい	3
周り	4	超える	3
心	4	力	3
世界	4		

1. レポートタイトルの抽出語リスト

レポートタイトル抽出語頻度は、表 1 に示した通りである。尚、研究の趣旨や統計上の意味合いを勘案し、最小出現数は 3 とした。

2. レポートタイトルの共起ネットワーク

レポートタイトルの共起ネットワークを示すことによって、単語の頻度分析だけでなく、単語同士の関係について係り受け頻度も分析することができる。図 1 に示す。尚、強い共起関係ほど濃い線となっている。

3. レポート本文の抽出語リスト

レポート本文 10 人分の抽出語頻度は、表 2 に示した通りである。尚、最小出現数は 8 とした。

また、レポート本文の中で、ジョンのことを「主人公」と表現したり、アリシアのことを「妻」と表現したり、学生個々のレポートに異なる表現で記述がされていたため、「ジョン」、「アリシア」という語句に統一して、分析を行った。

n

表 2 レポート本文の抽出語リスト n=89

抽出語	頻度	抽出語	頻度
ジョン	80	信じる	11
アリシア	37	わかる	11
存在	23	理解	11
幻覚	20	現実	10
病気	20	向き合う	10
愛	18	世界	10
見る	18	幸せ	9
感じる	17	人間	9
考える	17	伝える	9
統合失調症	15	本人	9
言う	14	チャールズ	8
精神	14	今	8
天才	14	治療	8
見える	13	友人	8
支える	12		

4. レポート本文の共起ネットワーク

レポート本文 10 人分の共起ネットワークを図 2 に示す。

V. 考察

1. レポートタイトルから捉えた学生の学び

レポートタイトルの抽出語の中で、最も頻度が多かったのは「愛」24 回であった。次いで「統合失調症」15 回、「人」12 回であった。タイトルは、レポートの内容を反映して学生につけてもらっており、短い文ではあるが、レポートの内容を凝縮し、その人の一番伝えたいことが端的に表現されていると言えるのではないかと思

われる。

共起ネットワークを見てみると、「愛」「統合失調症」「人」「周り」「支える」で 1 つのカテゴリを生成し、つながりも強くなっていた。学生は患者だけでなく、その周囲の家族、友人にも目を向け、「支える」「支えられる」ことの大切さに気づけたと、共起ネットワークから推察できる。

「愛」「統合失調症」「人」が、タイトルとしてどのような文脈で表現されているのか、KWIC コンコーダンスを用いて表 3~5 に示す。「愛」は、表 3 にあるように、「壊れた世界を支える愛」「病気を超えた愛」「統合失調症の患者の見る世界と周囲の人の愛」「愛の力」「薬は本

表 3 レポートタイトル「愛」の KWIC コンコーダンス

	愛	の強さ
夫婦の	愛	の強さ
	愛	で人間は変われる
	愛	の力
ちょっとした勇気と周りの支え、	愛	
アリシアの「	愛	」
「	愛	」に勝てるものはない
壊れた世界を支える	愛	
病気を超えた	愛	
人の	愛	
薬は本当の	愛	
	愛	を届ける
真の論理は「	愛	」。それは君だ。
ジョンとアリシア、そしてジョンの友達との	愛	を感じて
人と人をつなぐ心と	愛	の大きさ
家族の	愛	の大きさ
大切なものは	愛	
	愛	の大きさ、深さ
統合失調症の患者の見る世界と周囲の人の	愛	
必ず最後に	愛	は勝つ
	愛	の方程式
	愛	は奇跡をも起こす

表4 レポートタイトル「統合失調症」のKWIC コンコーダンス

	統合失調症	と向き合う
	統合失調症	になりやすい人の原因
	統合失調症	だと分かっているからこそその苦しみ
	統合失調症	を認め、共に生きていく
	統合失調症	を理解し、乗り越えた生涯
BeautifulMind	統合失調症	の怖さ、つきあいかたとは
	統合失調症	の方にもたらす周囲の方の力
	統合失調症	と人間関係
	統合失調症	の症状、治療と回復
	統合失調症	の恐ろしさとその病気を支える人の大切さ
	統合失調症	患者との関わりについて映画を見て学んだこと
	統合失調症	をのりこえて
	統合失調症	の患者の見る世界と周囲の人の愛
	統合失調症	患者の痛みと支える人の痛み
	統合失調症	の怖さ

表5 レポートタイトル「人」のKWIC コンコーダンス

	その	人	らしい人生のための信頼
統合失調症になりやすい		人	の原因
支えてくれる		人	がいること
		人	の愛
精神疾患の		人	との向き合い方
周りの		人	の支えによって生きている。
		人	と人をつなぐ心と愛の大きさ
統合失調症の恐ろしさとその病気を支える		人	の大切さ
幻覚が与える影響と周りの		人	の支援の大切さ
統合失調症の患者の見る世界と周囲の		人	の愛
統合失調症患者の痛みと支える		人	の痛み

当の愛」などと表現されており、「夫婦や友人、周囲の人の愛が患者を支え、回復につながる」と捉えたと推察できる。

「統合失調症」は、表4にあるように、「統合失調症と向き合う」「統合失調症を認め、共に生きていく」「統合失調症を理解し、乗り越えた生涯」「統合失調症の恐ろしさとその病気を支える人の大切さ」「統合失調症の症状、治療と回復」などと表現されており、「疾患と向き合

うことの大切さ”を捉えた側面と、“統合失調症という疾患の症状や特徴、治療などの一部”を捉えた側面があると推察できる。

「人」は、表5にあるように、「その人らしい人生のための信頼」「精神疾患の人との向き合い方」「人と人をつなぐ心と愛の大きさ」などと表現されており、学生は主人公を患者としてだけではなく、一人の人として捉えていたと考える。また、「支えてくれる人がいること」「周

りの人の支えによって生きている」など、支える人の存在として捉えている学生もおり、“その人らしく人生を送れるようにするために、どうかかわったら良いか”まで思考を巡らせていたと言えるのではないと思われる。

また、共起ネットワークでは、「精神疾患」と「向き合う」のつながりが強く、“病気と向き合うことが、回復やその人らしい生活を送ることにつながる”と、学生は感じ取っていたと推察できる。

2. レポート本文から捉えた学生の学び

レポート本文の抽出語の中で、最も頻度が多かったのは「ジョン」80回、次いで「アリシア」37回、「存在」23回であった。「ジョン」は主人公であり、「アリシア」はその妻の名前である。

共起ネットワークを見てみると、「ジョン」

「アリシア」「信じる」「支える」で1つのカテゴリを生成しており、つながりも強くなっていた。

「信じる」をKWICコンコーダンスで見ると、表6にあるように、「私もアリシアのように、その人を信じ、真正面から向き合いたい。」「どんなことが起きても信じぬく思いと覚悟が必要である。」「愛の力、信じることができる人の力はとても大きなものだと感じた。」などと表現されていた。また、「支える」では、表7にあるように、「援助側になったときに愛情をもって支えていきたい。」「どんなことがあっても支え続けられるような人になりたいと思った。」「どんな運命が待ち受けていても、一緒に受けとめて支え続けてくれるような人に出会えたらいいなと思った。」などと表現されていた。

これらのことから学生は、“家族がその人を信

表6 レポート本文「信じる」のKWICコンコーダンス

もし、私が愛する人が悩み孤独で戦っていたら私もアリシアのようにその人を	信じ	、真正面から向き合いたいと思った。
私ならジョンと同じく疑うし、真っ向から否定するし、何もかも	信じ	られなくなるだろう。
娘をお風呂に沈めようとしたり、空想の人物と話し、あばれても最後には彼を	信じ	、奇跡を起こることを信じ、ずっと彼を支えつづけた。
空想の人物と話し、あばれても最後には彼を信じ、奇跡を起こることを	信じ	、ずっと彼を支えつづけた。
アリシアのような女性になりたいと思っし、結婚するときに、どんなことが起きても	信じ	ぬく思いと覚悟は必要であり、そんなことが起きても支えつづけられる男性と出会いたいと思った。
そのためには、統合失調症の人を	信じ	ながらも違っていることは違うと教え、その人自身、全てを愛する気持ちが大切だと考える。
必死に家族を守ろうとした姿に委わっていた時には、愛の力、	信じる	ことができる人の力はとても大きなものだと感じた。
お互いが	信じ	続けることは、そう簡単なことではないが、ぶつかりあいながらもいつも守り続けたアリシア
それでも最終的には奇跡を	信じ	、支え続けると決めたジョンのアリシアの言葉、姿にとても感動した。
実は始めから存在していなかったと突然伝えられても、とても	信じ	られないだろうと思った。
ずっと目に見える数字、方程式を	信じ	続けた男が闘病していく上で支えてくれたアリシアの愛。

表7 レポート本文「支える」のKWICコンコーダンス

アリシアの目には見えない人々と話すジョンを	支え	愛し続けた。
あばれても最後には彼を信じ、奇跡を起こることを信じ、ずっと彼を	支え	つづけた。
どんなことが起きても信じぬく思いと覚悟は必要であり、どんなことが起きても	支え	つづけられる男性と出会いたいと思った。
夫が病気だとわかり、受け止め、	支え	続けるということとはとてもすごいことだし、愛がなければできないことと思う。
それでも最終的には奇跡を信じ、	支え	続けると決めたジョンのアリシアの言葉、姿にとても感動した。
アリシアの	支え	、サポートがなければ、ジョンは外に出たり、昔の友人に会うこともなかった。
どんな運命が待ちうけていても、一緒に受けとめて、	支え	続けてくれるような人にこれから先出会えたらいいなと思った。
私自身も将来パートナーにどんなことがあっても	支え	続けられるような人になりたいと思った。
しかし、それでも	支え	てくれたアリシアや友人達のおかげで、ジョンは幸せな人生を送ることができたのだ。
その人を尊重することを忘れない気持ちだが、精神の病気にかかった人を	支える	ために大切なものだと思った。
援助側になったときに愛情をもって	支え	ていきたいと思う。
ずっと目に見える数字、方程式を信じ続けた男が闘病していく上で	支え	てくれたアリシアの愛、そしてアリシア自信が愛と目に見えないものが助けてくれた。

表8 レポート本文「存在」のKWIC コンコーダンス

ジョンにとってチャールズという	存在	はとても大きなものだったのではないかと思います。
アリシアが精神科医に相談してジョンと医師が対談すると今まで周囲の人も	存在	すると思っていたチャールズも、ジョンに仕事を指示していたバーチャーもいない
その人は彼をほめ、彼がその人を必要とするときは必ず	存在	していた。
私には、その幻覚の人物が必要な	存在	だと思えた。
このような些細な違いが彼を苦しめ、また同時に特別な	存在	に変えていったのだと思った
ジョンにとって絶対的な	存在	であった友達が現実にはいないと知ったとき
見えてしまうのに無視し続けることができたのは、本人の意志の強さと仲間の	存在	であったと考える。
ジョンが今まで	存在	していると思っていたものが存在しないという現実を突きつけられても簡単に受け入れられるものではない。
ジョンが今まで存在していると思っていたものが	存在	しないという現実を突きつけられても簡単に受け入れられるものではないと思った。
見えていなくても、本人にとってはそれが心の支えだったり、大切な	存在	であって、それを否定されるのはとても悲しく苦しいことだと思った。
ずっと実存していると思っていたものが実は初めから	存在	していなかったと突然伝えられても、とても信じられないだろうと思った。
結婚式で親友と話すシーンがなかったことか疑問に思ったし、でもそれが	存在	していないものだったなんて分からなかった。
「統合失調症」という病気がどういったものなのかを前半のストーリーで	存在	していないものを存在していると思ひ込ませることで少しだけ患者目線で見るができる。
「統合失調症」という病気がどういったものなのかを前半のストーリーで存在していないものを	存在	していると思ひ込ませることで少しだけ患者目線で見るができるようにつくられている
そこにいる目に見えている話をして、一緒に仕事をしている、だから	存在	思い込みがこんなにも統合失調症の人にしてみればいよいよ普通に、鮮明に
実際に見ている友人、上司、先生といった人は	存在	していないものでジョン以外に見えていないものと告知されたらどんなにショック
ルームメイトのチャールズや暗号を分析するようにジョンに指示していたバーチャーは	存在	しているものだと見て見えていたがそれは幻覚であることを知って驚いた。
行動を不審に思い、医者に相談をしたことでジョンが病気があり2人の	存在	は幻覚であったと理解ができたのでアリシアの存在はジョンの生活の中で大切
ジョンが病気があり2人の存在は幻覚であったと理解ができたのでアリシアの	存在	はジョンの生活の中で大切だと思った。
そして、パートナーのアリシアの	存在	がジョンの生活を変えた一人であると思った。
映画の最初は彼が統合失調症であるために、ルームメイトが	存在	していると思っているということに気づけなかった。
病気を患っていたとしても、それは彼らの個性であり、その個性も彼という	存在	を作り上げる一つの大事な要素であると考える。
精神患者であっても、人は人であり、誰とも等しく、平等にある	存在	である。

表9 レポート本文「理解」のKWIC コンコーダンス

私は、正直者が伝えたいと願ったメッセージを	理解	できたかは分からない。
本人も人間からさらわれていることを	理解	しているものの、どうしても統合失調症が思ったことややりたいことの方に突き進んでしまう。
その部分こそ、他の人が	理解	してくれたら、どんなに重症な症状でも時間はかかってしまうが治っていくことはできる
頭の中で空想の世界を作り出していることは、多くの人にはなかなか	理解	してもらえないことではないと思った。
もし、友達にも	理解	してもらえず、アリシアも離婚してしまっていたら、ジョンの人の病気が治っていない
精神の病気は、他人には	理解	しても大変だと思った。
この映画では、ジョン自身も病気のことを	理解	しておらず、長い間幻覚を見続けていたことに気付いていなかった。
映画の中の時代では、今と比べて精神の病気に対する	理解	はあまりなかったと思う。
周囲の人の病気に対する	理解	と、病気があってもその人を尊重することを忘れたい気持ちがある。精神の病気に罹った人を支えるために大切なものだと思った。
ジョンが病気があり2人の存在は幻覚であったと	理解	ができたので、アリシアの存在はジョンの生活の中で大切だと思った。
天才であれ、どんな人間であれ、互いが歩み寄ることにより、相手のことを完全に	理解	することはできなくても相手と良い関係性を作ることとは可能であると考える。

じ、支えることが重要である」と、映画のストーリーの中から感じ取ったと推察できる。

また、抽出語において多く表れていた「存在」はどのようなつながりで表現されているのかをKWIC コンコーダンスを見てみると、表8にあるように、チャールズという名の友人をはじめとする、主人公の幻覚として現れる人物の「存在」として捉える学生が多かった(24回中17回)。「本人にとってはそれが心の支えだったり大切な存在であって、それを否定されるのはと

ても悲しく苦しいことだと思った。」「ずっと実在していると思っていたものが、実は初めから存在していなかったと突然伝えられても、とても信じられないだろうと思った。」「私には、その幻覚の人物が必要な存在に思えた。」などと表現されていた。幻覚が「病気」の症状であるとは決めつけず、「主人公の立場に立ち、その人の生活にどのような影響があるかまで考えることができていた」と言える。

共起ネットワークでは、「病気」「理解」「精

神」[治療]で一つのカテゴリーを生成しており、つながりも強かった。

KWICコンコーダンスで「理解」を見てみると、表9にあるように、「他の人が理解してくれたら、どんな重症な症状でも時間はかかってしまうが治していくことはできる。」「周囲の人たちの病気にに対する理解と、病気であってもその人を尊重することを忘れない気持ちが精神の病気にかかった人を支えるために大切なものだった。」と表現されていた。つまり、「周囲の人の理解が精神の病気の治療につながる、助ける」と学生が捉えていたと推察できる。

3. 映画「ビューティフルマインド」鑑賞を通しての学生の学び

考察1・2より学生は、映画「ビューティフルマインド」を鑑賞したことで、統合失調症の症状や特徴のみならず、患者や家族の思い、患者がその人らしく生きていくための支援まで考え、学ぶことができたとと言える。これは、糸賀ら⁸⁾の先行研究と同じような結果である。教科書や講義では、例えば幻覚など、知識として理解することはできても、その人の体験としてイメージすることは難しい。映画「ビューティフルマインド」の鑑賞を通して、学生は主人公やその家族の目線に立ち、その人の体験、思いに寄り添うことができたと考えられる。精神疾患を抱えていても、恋愛もすれば仕事もするし、夫や父親の役割も担う。学生は精神疾患を抱えながら生活をしていくことの大変さを感じ、それでも希望をもつことの大切さなど、その人の背景にも目を向け、一人の生活者として捉える視点を養っていた。それは、今後精神看護に取り組む上でとても重要なことであると考えられる。

しかし、精神に障がいをもちながら人生を歩

んでいくということの理解にはつながっているものの、投薬を続ける苦悩や、退院後も治療を続けていく必要性については、学生の学びの中にほとんど表現されていなかった。それについては、今後、講義などで教授していく必要があると考える。

4. 映像教材の有効性

先にも述べた通り、精神看護学において、教科書や講義だけでは症状や患者・家族の思い、患者との関わり方などをイメージすることは難しい。しかし、映画「ビューティフルマインド」を鑑賞し、実際に映像で統合失調症の症状の特徴や治療、患者との関わりを見ることで、精神に障がいをもつ人のイメージ化ができ、多少理解が深まったと考える。特に今回は、精神看護学概論の最終講義で鑑賞してもらっており、まだ、疾患の学習があまり進んでいない1年生を対象としたことで、疾患や治療などの理解が難しいのではないかという懸念があった。しかし、研究者らが大事にしている「精神に障がいをもつ人を一人の人として捉える」視点を、十分ではないが、もつことができたのではないかと推察できる。もちろん、映画は模擬患者であり、実際の患者との違いはある。しかし、精神に障がいをもつ人とほとんど関わったことのない学生にとって、映像を見ることで精神に障がいをもつ人のイメージ化ができたことは、2年次に精神疾患や精神看護を学んでいく学生の興味・関心を引く1つの手段につながるのではないかと思われる。さらに、3年次に精神看護学実習を行う学生の、不安や緊張の軽減に役立ってくれることを期待したい。

どの映像教材を選ぶのかは、教授者の手腕に委ねられる部分ではあるが、映像教材の一部は、

精神に障がいをもつ人の理解を深めるという学習効果を得ることができ、有効である。教授者としては、田邊ら³⁾が述べているように、「教授者の主観にとらわれることなく、その時代を反映した、偏らない精神障がい者の理解をしてもらえるような教授法」を常に追究していくことが大切であると考えられる。

5. 研究の限界と今後の課題

本研究では、映画「ビューティフルマインド」鑑賞からの学生の学びを、KH Coder 3 を用いて分析・検討を行った。KH Coder 3 は機械的な手法で分析するため、その文脈に含まれる微妙なニュアンスや曖昧な表現を取り込むには限界がある。今後は、研究者自身による質的データ分析を加え、混合研究法の一手法としての「グラウンデッドなテキストマイニング・アプローチ」(GTMA: Grounded Text-Mining Approach) による研究を進め、精神看護の教育に活かしていきたい。

VI. 結論

学生は、映画「ビューティフルマインド」の鑑賞から、統合失調症の特徴や症状の一部だけでなく、患者・家族の思いや、疾患を抱えながらも人生を歩むことができるということを、学ぶことができていた。また、精神に障がいをもつ人を、一人の人として捉える視点を養っていた。

これらのことから、適切な映像教材は、精神に障がいをもつ人のイメージ化を図ることができ、学習効果が得られると考えられる。

謝辞

本研究の趣旨にご理解をいただき、快く協力をしてくださいました A 大学看護学科 2 年生の皆様へ深く感謝申し上げます。

利益相反

この研究に関して、利益相反はない。

【引用・参考文献】

- 1) 看護基礎教育の充実に関する検討会. 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書. 厚生労働省 2007, 4. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>, (参照 2018-05-10).
- 2) 荻野雅, 武井麻子, 稲岡文昭ほか. わが国の精神看護学教育の実態. 精神保健看護学会誌 1997, 6(1), p.12-25.
- 3) 田邊要補, 藤田勇, 田沼佳代子. 看護学生の精神障がい者に対するイメージの変化. 高崎健康福祉大学紀要. 2016, 15, p.47-54.
- 4) 栗本一美, 塚本千恵子. 精神疾患患者と接しての学生のイメージ変化と実習の学び—精神看護学 1 日実習を体験して—. 新見公立短期大学紀要. 2003, 24, p.171-180.
- 5) 谷本千恵. 看護系大学における精神看護学教育の内容と課題. 石川看護雑誌. 2015, 12, p.85-92.
- 6) 江藤和子, 椎野雅代, 宮原舞子ほか. 精神看護学における映像教材の有効性の検討. 第 22 回日本精神科看護学術集会. 2015, 58(2), p.244-248.
- 7) 篠原由利子. 映像から学ぶ精神障害者の病の体験. 福祉教育開発センター紀要. 2015, 12, p.37-51.
- 8) 糸賀暢子, 西原みゆき. 精神看護学授業におけるビデオ教材の意義—「ビューティフル・マインド」鑑賞後の学生の精神障害者に対する認識傾向—. 日本看護学教育学会誌. 2004, 14, p.182.
- 9) 原田由香, 北村育子, 中川麻衣子. 精神を病むということの理解における映画「A Beautiful Mind」視聴の意義. 日本看護学教育学会誌. 2014, 24, p.226.